

「送賣茶翁再游洛序」から見る売茶翁

馬 叢 慧

目次

- 1、はじめに
- 2、「送賣茶翁再游洛序」について
- 3、終わりに

1、はじめに

煎茶道の「中興の祖」とされる売茶翁（1675年-1763年）は、明治初期から注目され、研究されるようになってきたが、売茶翁本人に直接面識があった人による記述は比較的少ない。その一つが大典禪師¹（1719年-1801年）による「賣茶翁傳」²であり、もう一つは大潮禪師³（1676年-1768年）による「送賣茶翁再游洛序」である。

「送賣茶翁再游洛序」は、売茶翁が67歳で故郷の佐賀に帰り、還俗して再び京都に戻る時に大潮禪師が書いたものと思われる。全文800字程度の漢文であり、大潮の『魯寮文集』に収録されている。本稿では『魯寮文集』（延享2年刊国立国会図書館蔵本）を基本資料としている。管見の限りでは『佐賀県郷土史物第一輯 脊振山と栄西；大潮と売茶翁』（1974年）においてのみ、資料として活字化され、部分的に注釈されているが、詳しい分析はなされていない。

本稿では「送賣茶翁再游洛序」を和訳し、さらに分析することによって、大潮禪師から見た売茶翁についての解明を試みる。

2、「送賣茶翁再游洛序」について

「送賣茶翁再游洛序」は、売茶翁が佐賀から京都に戻ろうとする時、旧知の人物が売茶翁に京都で茶を売る理由について問いかけたことに対する、売茶翁と大潮の会話の記録であり、売茶翁を理解する上では、非常に重要な資料である。なお、問いかけた

人については「人或問翁者」と書かれたのみで、内容からは架空の人物の可能性もある。

序の最初は、大潮の売茶翁についての評価から始まり、以下のようにある。

「曰賣茶翁之在洛也。雖其無以自給乎。然不欲求於外。故游非其方不從。交非其人不接焉。唯以其鬻茶。故名徧五畿。然五畿之所以知賣翁。又奚盡哉」（曰、売茶翁の洛に在るや、其れ以て自給する無しと雖も、然も外に求ることを欲せず、故に游其の方に非ざれば従わず、交わりその人に非ざれば接せず、唯其の茶を鬻ぐ故を以て、故に名は五畿に徧き、然も五畿の売翁を知る所以、又奚ぞ尽さんや、）

「方」は、『莊子』大宗師篇に、「孔子曰、彼遊方之外者也、而丘游方之内者也。」と「方外」、「方内」とあり、成玄英の『莊子疏』では、「方、區域也。」と「方」を解釈している。つまり、区域、区劃の意味である。「五畿」は、畿内の五つの国、山城、大和、河内、和泉、摂津の五国の総称である。

ここでは、売茶翁が京都において茶を売り、自給できなくても、人に頼ることなく、自分の志に合わない道に進むことなく、趣が合わない人とは接していないことが分かる。これは、江戸時代の『近世畸人伝』（1790年）や『落栗物語』（出版年不詳）に描かれた、どんな人にでも同じように接していた、大衆向けの売茶翁像とはイメージ⁴が随分かけ離れていることが分かる。また、売茶翁は61歳の時に京都で通仙亭を開き、67歳で帰郷するまで六年しか経っていないが、既に京都を中心とした地域で有名になっていた様子うかがえる。

続いて、さらに大潮は売茶翁について次のように説明している。

「翁去郷里之十年。而展其師親墓來歸。獲復與元

皓相歡以及明年之春。賣翁之意。無為乎郷。無為乎郷者無執乎郷。則乃知其為無執乎郷者。為無執乎世者已。不其大哉。」

(翁郷里を去ることの十年にして、其の師親の墓を展して来たり帰り、復た元皓と相歡することを獲て、以て明年の春に及ぶ、売翁の意郷に為すこと無し、郷に為すこと無きは、郷に執ること無ければなり、則乃知る其の郷に執ること無しと為するは、世に執ること無しと為るは、已に其の大ならずや、)

売茶翁は故郷を離れて十年、亡くなった師の化霖の墓参りで帰って来た際に大潮と会えたところなので、売茶翁が67歳で故郷に帰り、還俗したときであることがわかる。売茶翁は還俗して、再び佐賀を離れることを大潮に伝えたようで、大潮は売茶翁がまた故郷を離れることを「賣翁之意。無為乎郷。無為乎郷者無執乎郷。則乃知其為無執乎郷者。為無執乎世者已。不其大哉。」とし、売茶翁は故郷に対して執着を持たない人であるため、世の中にも執着を持たない、これこそ「大」なる人だと絶賛しているのである。

しかし、その偉大な売茶翁は、大潮の敬意同様には周囲から理解されていなかったようで、京都に戻ろうとした時、親戚などが売茶翁を故郷に引きとめようとした。

「居亡何。賣翁復將之洛。於是親戚故舊懼往。而不返也。計欲留之竟不可得。」

(居ることいくばくも亡くして、売翁復た將に洛に之かんとす、是に於て親戚故旧往きて返らざらんことを懼るるや、計りて之を留めんと欲す、竟に得るべからず、)

そして、売茶翁に対して、問いかける人まで登場したのである。

「人或問翁者曰。今翁之意無執乎世。而猶所執乎洛耶。夫人生一世間。各有所事事。拘拘乎。役役乎。不能知其所休已。第如翁者則郷與洛又奚擇焉。孔子不云何陋之有。今翁所有者。豈獨其茶耶。又奚以之洛而賣為。翁不答乃顧余而笑。」

(人翁に問う者或りて曰く、今翁の意世に執ること無し、而して猶お洛に執る所あるがごとし、夫れ人

一世間に生まれて各々事を事とする所あり、拘拘と役役と、其の休する所を知ること能わざるのみ、第翁の如きは則ち郷と洛と又奚ぞ択ばん、孔子云わずや、「何の陋しき之有らん」と、今翁の有する所は、豈独りの其の茶のみならんや、又奚ぞ以て洛に之きて売ること為さん、翁答えず、乃ち余を顧みて笑う、)

「拘拘」は、まがって伸びない様。『莊子』大宗師篇に「嗟乎、夫造物者、將以予爲此拘拘也。」とある。「役役」は、労役して休まぬ様子。『莊子』齊物篇に、「終身役役、而不見其功。」とある。「何陋之有」は、『論語』第九の「子欲居九夷、或曰、陋如之何、子曰、君子居之、何陋之有。」が出典で、君子がそこに居住すれば文明や学問の教化が自然に進むと故郷を「九夷」に喩えたのである。

売茶翁のような世の中に執着を持たない人が、どうして故郷より京都を選択し、またどうして茶を売ることかという問いかけであった。さらに、莊子の言葉「拘拘」と「役役」、孔子の言葉「何の陋しき之有らん」を用いて、茶という物に拘り、京都のような場所に拘りすぎるべきではないと売茶翁にあてこすろうとして問いかけたのである。しかし、売茶翁はこれに対して答えず、ただ大潮を見ながら微笑みだけであった。

「又問。昔如来非夫自覺以覺他。出世以遂懷四十九年以賣所有於群類者乎。至若諸代列祖鳴鐘擊鼓。其所有何適而弗為。是以臨濟以喝。德山以棒。石鞏以彎弓。不一而足。若夫孔老世之聖者也。老子曰。良賈深藏。孔子曰。求善賈而沽諸。此亦有之至也。而彼且奚適。今翁所有者。豈獨其茶耶。又奚以之洛而賣為。雖然人各有所好。物各有所托。今翁所為豈托與。翁於是益笑。問者茫然。少焉。乃出。」

(又問う、昔如来は夫の自覺して以て他覺し、世に出て以て懷を遂げ四十九年、以て所有を群類に売る者に非ずや、至るに諸代列祖鐘を鳴らし、鼓を撃ち、其の有する所いずこに適くとしてか、是を以て臨濟は喝を以てし、徳山は棒を以てし、石鞏は弓を彎くを以てす、一にして足らず、夫の孔老の若きは、世の聖なる者なり、老子の曰く「良賈は深く蔵す」孔子の曰く「善き賈を求めて諸を沽らん」、此れ亦有するの至りなり、而るに彼且に奚くに適かんとす、

今翁の有する所は、豈独り茶ならんや、又奚ぞ洛に之を以て売ることを為さん、然りと雖も人各好む所有り、物各托する所有り、今翁の為する所、豈托するが為か、翁是に於いて益笑う、問う者茫然たり、少して乃ち出ず、)

「臨濟以喝」、「臨濟」は臨濟義玄(?-867年)、中国の禅僧で臨濟宗の開祖。「喝」という怒鳴る禅風である。「徳山以棒」、「徳山」は徳山宣鑑(780-865年)、棒を使って修行者を指導することで、「臨濟の喝、徳山の棒」として有名である。「石鞏以彎弓」、「石鞏」は唐代の石鞏慧藏が弓を張って来者に向ったのがその禅風である⁵。「良賈深藏」は、賢い商人は良い品物を持っていても店頭には並べたてず店の奥深くに収蔵する。本当に学識がある人は人前にひけらかさないことを喩える。『史記』老子韓非列伝に、「良賈深藏若虚、君子勝徳、容貌若愚。」とある。「求善賈而沽諸」は、美玉は良い買い手に売るべきである、つまり自分の学識を認めてくれる人を待つことを指す。『論語』子罕に「子貢曰。有美玉於斯。韞匱而藏諸。求善賈而沽諸。子曰。沽之哉。沽之哉。我待買者也。」とある。

それでも売茶翁が答えないため、質問者はさらに問いかけたのである。如来が四十九年をかけて説法、禅宗は鐘を鳴らして鼓を打ち、臨濟は喝、徳山は棒、石鞏は弓によって禅の示し方が違うことを言及し、質問者は仏教、特に禅宗に詳しい人物であることがうかがえる。また、老子の「良賈は深く蔵す」、孔子の「善き賈を求めて諸を沽らん」の言葉を借りて、売茶翁が自己顕示すべきではないと主張しているのである。

さらに、文中の「此亦有之至也。而彼且奚適。」(此れ亦有するの至りなり、而るに彼且に奚くに適かんとす、)は、『莊子』逍遙遊篇の「此亦飛之至也。而彼且奚適也。」(此れ亦た飛ぶの至りなり、而るに彼且に奚くに適かんとするやと。)⁶からの引用と思われる。これは『莊子』逍遙遊篇においては、斥鴳(うずらのような小鳥)が鯢(大鵬のような大鳥)を嘲笑った言葉であり、「此小大之辯也」(此れ小大の弁なり)⁷という、斥鴳には鯢の志を分かるはずがないと表現したものであった。質問者は莊子の言葉を借りて、売茶翁が茶を売ること、禅の列祖、老子や孔子のような先哲たちの境地まではたどり着け

ないだろうと厳しく問い詰めたのである。

最後に、「雖然人各有所好。物各有所托。今翁所為豈托與。」(然りと雖も人各好む所有り、物各托する所有り、今翁の為する所、豈托するが為か、)と、売茶翁は茶を売ることについて託しているのかと質問した。ちなみに、「人各有所好」は、白居易の詩「鶴」の「人各有所好、物固無常宜」に、「物各有所托」は、陶淵明の詩「感士不遇賦」の「萬物各有托、孤雲獨無依」を思わせる句である。

ここで売茶翁に問いかけた内容を見てみると、質問者は一般の人ではなく、中国古典について、かなりの素養の持ち主であった。興味深いことに、質問者が知識をひけらかして、売茶翁を論破しようとしたのに対して、売茶翁は終始微笑みだけで、答えようとしなかったのである。

質問者は売茶翁の答えを得られず、しばらくして立ち去った。その後、売茶翁と大潮の会話が始まるのである。

「余與翁相謂。凡今之人所同欲得者。最莫過利。而名次之。利之所以欲得於己者。最莫過今人之不由道。而銜其名以釣。然彼急其得於名。而降焉者急其得於利。利之與名。崇卑雖殊。均之急於得者也。然則前所謂不由道者。即其所得。固自不能酬其所欲也。」

(余翁と相謂えらく、凡して今の人同じく得んと欲する所の者、最も利に過ぐることなし、而して名之に次ぐ、利の己に得んと欲する所以の者、最も今の人の道に由らずして、而して其の名を銜いて以て釣るに過ぎたることなし、然りとはいえども、彼は其の得ることを名に急にす、而して降れる者は、其の得ることを利に急にす、利と名と崇卑殊なりと雖も、均しく之得るに急なる者なり、然れば則ち前に所謂の道に由らざる者、即ち其の得る所あるも、固より自ら其の欲する所に酬うること能わず。)

「名利」は名誉と利益、功名と利禄。『戦国策』秦策に「張儀曰、争名者於朝、争利者於市。」とある。

ここで、売茶翁は問いかけに対して答えなかったが、大潮に対しては口を開いたのである。売茶翁は「名利」について、当時の「不由道」(正当な方法を守らない)の人は、利益のために名誉を欲しがり、名誉を手に入れても、その欲を満足させることがな

いと批判した。これに対して大潮は、次の様に言った。

「元皓曰。嗟名利哉。得亦有道焉。故古之由道者。其於名利亦稍不期而集。豈自銜容致哉。且名利之於人。莫大於有天下也。而舜之所以有天下。豈可期乎。故曰舜有天下而弗與焉。我佛世尊。初棄金輪寶位。而脫屣名利。由是觀之今為佛子。雖王天下非貴也。況世之瑣瑣者何足道哉。而今之人上者名而自釣下者利。而莫知其足。遑遑焉汲汲焉。終身於囁嚅伺候之間。了不知其名利之去道。而非我有也。甚矣。名利之害道也。夫以釋焉而得。儒焉而得。雖有能不害乎我者。幾希也。獨賣翁以其鬻茶。故名徧五畿。然五畿之所以知賣翁。又奚盡哉。乃今或以其所有問焉。斯不知翁者也。而又不知其茶者也。猶且欲其有言。即醜大於世。急名利也。嗟翁信能賣哉。」

(元皓が曰く、嗟名利なるかな、得るも亦道有り、故に古の道に由る者、其の名利に於いて、亦稍期せずして集まる、豈自ら銜いて致すを容れんや、且名利の人に於ける天下を有するより大なるはなし、而して舜の天下を有する所以、豈期す可きや、故に曰く舜天下を有し、与らずと、我が仏世尊初め金輪宝位を棄て、而して名利を脱す、是に由りて之を觀れば、今仏子為る者、天下に王たりと雖も貴に非ず、況や世の瑣瑣たる、何ぞ道に足らんや、而るに今の人上なる者は名にして、以て自ら釣り、下なる者は利にして、其の足ることを知ることなし、遑々たり、汲々たり、身を囁嚅伺候の間に終わり、了に其の名利の道を去りては、我が有に非ざることを知らず、甚だしきかな、名利の道に害ある、夫れ積を以てしかも得る、儒にしてしかも得る、能く我を害せざる有ると雖も、機希なり、独り売翁其の茶を鬻ぐを以て、故に名五畿に徧し、しかも五畿の売翁を知る所以、又奚ぞ尽くさんや、乃ち今或(人)其の所有を以て問う、斯れ翁を知らざる者なり、而して又其の茶を知らざる者なり、猶お且つ其の言有らんことを欲す、即ち醜きこと世に大なり、名利に急なり、嗟翁は信とに売ることを能するかな。)

「弗與」は与えないの意味。『韓非子』説林上に「因索地於趙、弗與、因圍晉陽。」とある。「瑣瑣者」は計謀の狭く浅い者。『爾雅』釋訓疏に「舍人曰、瑣瑣、計謀褊淺之貌。」とある。「遑遑焉」は忙しく、

落ち着かないさま。『魏志』文帝紀に「洙泗之上、悽悽焉、遑遑焉。」とある。「汲汲焉」は忙しいさま、せわしく努めるさま。『禮記』問喪に「望望然、汲汲然、如有追而弗及也。」とある。「囁嚅」は臆病で、口を動かすだけで、はっきり物を言えないの意味。韓愈の「送李愿歸盤谷序」に「口將言而囁嚅。」とある。「伺候」は狙うかがうの意味。『呉志』全琮傳に、「伺候不休。」とある。

大潮は「名利」について売茶翁と同じ意見を示し、さらに最も大きい「名利」としての「天下」を例にして、「舜」や「我佛世尊」は自ら天下を望んだのではなく、天下を手に入れても、それを利用して「利」を得ようとしていない。ここで大潮は、「舜」や「我佛世尊」と同じく、売茶翁も「名利」を望んで、京都で売茶したわけではないと代弁したのであろう。そして、「名」を利用して「利」を得ようとする世俗の人は、満足することを知らず、「名利」を求めることが「道」に反することを理解していないと厳しく批判したのである。さらに、売茶翁について、その名が五畿に広がっても、売茶翁を本当に理解する人がおらず、売茶翁に質問したような人は、売茶翁を知らない人、売茶翁の茶を知らない人だと嘆いたのである。

3、終わりに

「送賣茶翁再游洛序」は、売茶翁の法弟である大潮禪師が書いたものであり、売茶翁を理解するのに重要な資料である。「序」を和訳し、解釈することを通して、当時一般的に、売茶翁は「名」を求めるために京都で茶を売っていると思われていた背景をうかがうことができる。また、「送賣茶翁再游洛序」の記述によれば、売茶翁がどうして京都で茶を売ることになったかという問いに対して、最後まで答えることなく、世間一般からの理解を求めていなかった。大潮は一般の人と違って、売茶翁の思いを深く理解し、売茶翁の思想や精神は名利を追求する人に理解できるものではないと代弁したのである。これについて、「序」の最後に、「翁曰。詩云人之有心。吾付度之。吾子之謂也。吾其行哉。吾子必將繼吾廼行。」(翁の曰く、詩に云く、「人の心有る、吾之を付度する」は、吾子が之謂いなり、吾其れ行かんかな、吾子必ず將に我に繼がんと欲す、廼ち行く、)

とあるように、売茶翁自身も、世間一般的にどう思われているかを「人の心有る、吾之を忖度する、吾子が之謂いなり、」と大潮の言うことを肯定し、それでも「吾其れ行かんかな」と京都に戻る決意を表したのである。

これまで見てきたように、売茶翁の茶の真意について語られている記録がほとんどない中で、「送賣茶翁再游洛序」はその一端に触れる貴重なものであると言える。と同時に、売茶翁が大潮の洞察力に感銘しきりであった点も、大潮こそが売茶翁の真の理解者（知己・知音）に限りなく近い存在であったことを知る証左となるであろう。

付記 漢文については、『大漢和辞典』（大修館書店）及び『漢語大詞典』（中国漢語大辞典出版社）を基本に出典を調べた。

（注）

- 1 江戸中・後期の文人僧。号は梅莊、大典、東湖山人、不生主人など。顯常は諱。近江の人で、始め黄檗に入り、のち相国寺に転じて僧となる。儒学を宇野士新に、詩文を大潮に学んだ。
- 2 後世の売茶翁研究において、重要な基礎資料で、800字程度の漢文である。「賣茶翁傳」は『賣茶翁偈語』（1763年）に編纂、出版されているが、後々修正されて、大典禅師による『小雲棲稿』にも収録されている。

3 黄檗宗の僧、俗姓は浦郷である。道号が大潮であり、月枝・魯寮・西溟・泉石陳人とも号した。肥前伊万里の出身で、売茶翁と同じ龍津寺の化霖禅師に師事し、売茶翁の法弟にあたる。

4 小論「売茶翁像の変遷－江戸時代の史料における売茶翁伝の比較－」（『下関市立大学創立60周年記念論文集』P135）参照。

5 石鞏に参禅した三平（義忠禅師）との逸話は「石鞏張弓」「三平開胸」として知られる。

6 金谷治訳注『莊子 第一冊内篇』岩波書店 1971年 P24

7 金谷治訳注『莊子 第一冊内篇』岩波書店 1971年 P24

参考文献

高遊外『賣茶翁偈語：附名公茶器銘』（田中樞治郎、1925年）

伴蒿蹊『近世畸人傳』（青山堂書房、1911年）

国書刊行会編「落栗物語」（『百家隨筆』第一巻、国書刊行会、1918年）

大潮元皓「送賣茶翁再游洛序」（『魯寮文集』二巻、二西堂千綿新五郎 一止人額田正三郎、1745年）

金谷治訳注『莊子』第一冊〔内篇〕（岩波書店、1971年）

川頭芳雄『佐賀県郷土史物第一輯 脊振山と栄西；大潮と売茶翁』（川頭芳雄、1974年）

馬叢慧「売茶翁像の変遷－江戸時代の史料における売茶翁伝の比較－」（『下関市立大学創立60周年記念論文集』、下関市立大学学会、2017年）